

学校名	研究課題	研究手法
金沢市立犀川小学校	算数	学習評価の充実

1 研究の重点と具体的な取組

重点①：考えを深めさせるための支援の工夫

低学年部 ・話型，話し合いのルールを提示し，それを使って話をする。

- ・必要感のある場面で，ペアで話し合う。

高学年部 ・考えを持つための手がかりを準備する。

- ・ネームプレートの利用や板書の工夫で自分の位置を明確にさせる。
- ・問い返しや反応を積極的に行う。

重点②：学びの深まりを把握し，児童の変容の自覚を促す評価方法の工夫

低学年部 ・できるようになったことを実感できる質と量の適用問題を用意する。

高学年部 ・目的を明確にして適用問題を選択する。・ふり返りの視点を明確にする。

2 取組の検証

重点①について 教職員自己評価結果を見ると、「自分の考えを，話の組み立て等を工夫して発表するよう指導している」「みんなで学びを深めるためにペアやグループ等による交流の場を設定している」は93%の肯定的回答が得られており，重点①に関しての指導を意識して行ってきたことが分かる。

しかし，児童アンケートでは「ペアやグループ学習で，自分の考えを話すことができる」と肯定的回答をしている児童は76%，「理由をつけて考えを持てる」と肯定的回答をしている児童は71%と大きく減る。教師の取り組みが児童の「できた」という実感につながり，より深まりのある交流となるよう考えていく必要がある。

重点②について 教員アンケートで取り組めたとの回答は94%で，重点②に関しての指導を意識して行ってきたことが分かる。授業の終末に適用問題に取り組む授業パターンが定着し，児童が適用問題に意欲的に取り組む姿が見られた。

ふり返りは，普段は簡単なマークで自己評価させ，単元の要所では視点を与えて文でふり返りを書かせた。その中で，児童は自分の学びを俯瞰的に捉えることができるようになってきた。

3 成果と課題

前時とのつながりを意識した導入の工夫や，書かせ方の工夫（ワークシート等）を行うことで自分の考えを持って交流に臨ませることができた。また，児童自身が話し合いの目的を明確に持ち，主体的に話し合いに臨めるようにもなってきた。課題は，必要感のある場面で，目的意識をもたせてペアやグループ学習を行うことや，子ども同士で考えを深めることができるように，「問い返し」のスキルアップを図ることである。

適用問題を通して「できるようになった」「わかった」と実感した児童が多く見られた。ふり返りの書き方が定着してきたが，まだ十分時間がとれていない。適用問題の質と量の充実，ふり返りの視点や書き方の吟味，タイムマネジメント等が今後の課題である。

